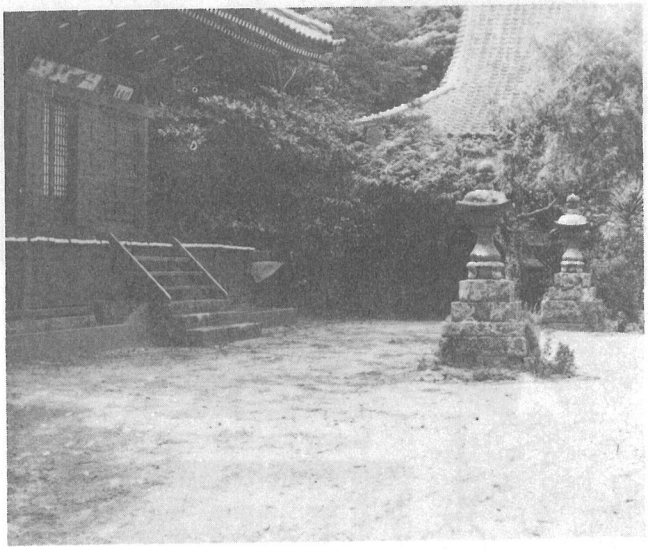
横芝の碑（その八十五）

北清水不動院の御神燈

北清水に不動院という寺があります。シリーズその六十八でご紹介いたしました、眞心影流の川島堯先生の碑の建っている寺ですが、清水山、不動院と刻まれた山門を入りますと正面が客殿で、すぐ左手に朱塗の本殿が背景の常緑樹に華麗な壮厳さを漂わせ、その前には一対の灯篭が建っています。

庶民の神　不動院

ところが、その灯篭には〝御神燈〟と刻まれているのです。広辞苑等によりますと御神灯とは〝神に供えるみあかし、神あかしの敬語等〟と記されています。「寺院に御神灯？」と不思議な感じがいたします。このことについて、住職の、庄内静泉師の話によりますと、「この不動院は宝暦二年に建てられたもので、昔から農山漁村の人々の間の信仰が厚く、毎年正月二十八日には縁日が立ち、近隣近郷の人々が〝不動院の縁日〟と呼んで待ちかねていた様に集って来て、屋台店も門の外数町（一町は約百m）に及ぶ賑いであった。縁日は一時の賑やかさはなかったが最近まで続いていた。信仰は特に漁民の間に盛んで、平素の参詣は勿論、寒中の裸参りの風習もあった。これには遠い所では、緑海村（現成東町）や蓮沼等二里（八km）も先から褌（まわし）一本でお参りに来た位である。この御神灯は蓮沼村の善塔寅次郎という人の献立されたものであるが、漁業に携わる人達特有の気質として、佛という言葉を嫌うことから、不動明王が何時か不動明神となって信仰の中では神として定着し、献納の灯篭も御神灯となったものと思われる。」ということでした。



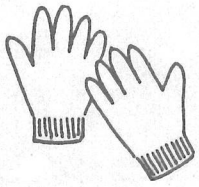
▲ 不動院の御神灯と客殿、本堂

良心が生んだ御霊験

不動院は、その山号が示す通り北清水に縁を持ち、壇家も多いということですが、地元のある古老はこんな話をしてくれました。「昔不動院の信者の中に、少し怠け者がいました。余り物がないので何時も貧しく、時々不動様のお供え物の米や餅等を盗んでは懐に入れて帰っていました。或日のこと又お供え物を盗もうとして、手を伸しながら不動様を見ますと、何時も怖い筈の顔がニッコリ笑っているのです。そればかりではなく、盗もうとした品物がすぐ目の前に来ているのです。びっくりしたその怠け者の信者は『これは大変だ、不動様はみんな知ってござらっしゃるのだ――どうかお許し下さい、着物を着て来ると又盗んで懐へ入れたくなる、これからは裸でお詣りに来ます。』とお祈りをしながら地面に頭をすり付け暫らくして顔を上げて見ますと、不動様もお供えの品も元のままでした。それでもその人は心を入替えて一生懸命働くようになり、毎月一度のお詣りには必ず裸で、寒中でも同じ姿でお詣りをしました。こうして一生懸命に働きましたので、だんだんお金も溜って暮しも楽になりました。これが裸詣りの始まりだと伝えられています。」と凡そ以上の様な内容でした。

これは、恐らくその人の良心が自分を戒め、不動様のお顔や、お供え物に変化があった様に見えたというざん悔話と、それに寒中の裸詣りが結び付いたものと思われます。しかし、ここに建っている御神灯献立の経緯等を考えますと、なかなか面白い話だと思います。

写真はその御神灯で、正面には御神灯、台石には、文久元年（一八六一）四月吉日、蓮沼村、善塔寅次郎、と刻んであります。御神灯の笠の下には窓の付いた灯明台があったのですが、何時か破損し取外したということです。正面の大きく見える屋根が客殿で、左手に見えるのが本堂ですが朱塗の色彩が見事です。

◎本稿取材に当り、不動院住職、庄内静泉師並びに地元の方々の御指導と、御協力を頂きました。尚、不動院は著名な寺院なので今回も案内図を省略させて頂きました。

町文化財審議会委員　小沢春光氏寄稿